第１６９号
平成１５年１０月
© 2003
E-mail :
shimz@mb.infoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SCだより

編集発行人
清水吉男
（株）システムクリエイツ
横浜市緑区中山町 869-9
電話/FAX 045-933-0379

Café りふれ 34回め

MENU
特製ブレンド 380
レモンティー 350
日替りケーキ 300
ぷろせす 無料
アルコールは置いていません

アメリカの経済はドル安の効果もあって、確実に改善の方向にあるようだ。だが、雇用はこの一年余りで１００万人も減少している。それでいて、経済成長率が４％も上がっているということは、とんでもない生産性の向上が実現しているはずだ。
この「生産性」というのは、突き詰めれば「雇用」に触れることになるため、日本の企業にとっては非常に厄介なものである。特に、この夏に労働基準法が改訂（改正とは言いたくない）され、生産性の向上に伴っての解雇は完全に不可能になったことで、企業としては、ますます身動きが取れなくなった。
CMMだって、プロセスの改善を通じて品質を改善すると言うものの、最終的なところは生産性の改善であり、経営指標の改善である。このとき、生産性を上げた人たちが、それに見合う分の報酬を得ることができなければ、単なる慈善活動になってしまう。その状況で継続した活動にすることは容易ではない。

今、カウンターの前で二人のソフトウェア技術者がCMMの取り組みについて話しをしているようだ、私の方は、他の客の応対をしているので、彼らから話しを振るタイミングがなく、自分たちで話しをしている。

テーブルの客にコーヒーのセットを届けて、使ったドリップなどを水洗いしながら彼らの話しに耳を傾けてみた。どうやら、リスク管理や要件の追跡の取り組みの運用のところで引っ掛かっているようだ。

私の方の手が空いたとみて話しを振ってきた。
「ねぇ、マスター。他のところでは要件の追跡やリスク管理などで、軽減措置の実施期限や追跡の実施日の管理はどうやっているのでしょう」
「どういうことだい？」
「マスターが以前話していたように、要件の実現状況を追跡するために、追跡リストを作ったのですが、実際に、そのリストを毎日見て、該当する項目があるかチェックしようとしたのですが、つい見そびれてしまってうまくいかなかったのです」
「なるほど、リスクの軽減措置の対応策を依頼したものの、その結果を確認したり、要件の追跡が実施されたかどうかを確認するのが手抜きになってしまうんだね？」
「そうです。リスクの軽減策の方は、別に設計の仕事を分担している人にお願いすることがありますので、すぐに対応してくれるとは限りません。私自身が対応する場合でも、つい対応を忘れてしまいます」
「そうだね。その種の作業は、必ずしもスケジュールに載せて管理しているとは限らないからね。実際、業者に連絡して何かを確認するだけなら、“スケジュール”に載せにくいね。どちらかというと“ToDoList”向きだね」
「Excel の追跡リストから、いちいち“ToDoList”にピックアップするのも二重作業に見えますし・・・」
実は、このような状態に陥っている人たちは少なくないようで、何度か相談を持ちかけられている。

「あなた達は、何か勘違いしていないか？」
「勘違いって？」と怪訝な顔をしてこっち見つめている。
「いったい、いつの時代に生きているのかね？」
「“今の時代”ですが」
「この店は、“あの世の店”じゃないんだから、“今の時代”に決まっているよ。そうじゃなく、コンピュータは何のためにあるのかね？
あなた達のやり方を見ていると、机の上のパソコンは、単に紙に書いていたことが置き替わっただけじゃないか」
「・・・・」黙り込んでしまった。
もしかすると、彼らは“手作業”に何の疑問も感じていなかったのかもしれない。

「あなた達は、Excel のマクロが使えないのかね」
「はい、使ったことはありません」
「じゃ、Excel は、ただ表の大きさが自在に伸縮する便利な罫線のシート、という認識かね」
「それに近いかしれません」といったものの、ばつの悪そうな顔になった。
「その状態で、CMMだのプロセス改善だのとやったら、仕事が増えてかなわないだろう」
「はい、正直なところ大変です」
妙なところで胸を張っている。
「たしかに、組み込みシステムを開発しているＳＥは、どちらかというと『C』だとか『C＋＋』といった言語は扱い慣れているが、Excel のマクロやビジュアル系の簡易言語には不慣れな人が多いね」
「そうかも知れません。私の周りを見ても、だいたい同じ状態です」
「そもそも、あなたたちは『生産性』に対する認識が稀薄すぎるヨ。同じ作業をするのに、どれだけの時間でできるかを競っていないから、考えつかないのだろう」
「生産性というのは、プロジェクトの開発のところで言われますが、その他の作業ではほとんど意識したことはありません」
「そんな状態で“プロセスを改善すべき！”と言って走り回るのはおかしくないかい？　第一、やることが増えてしまって、逆にプロセスを省かざるを得なくなってしまうか、追加のリソースを投入しなければならなくなるよね」
「それじゃ、意味はありませんよね」と居づらそうに言った。

「追跡リストやリスクリストは、パソコンを起動させたときに自動的に走らせるようにできるだろう？」
「はい、できます」
「だったら、マクロを組んで、期限や対応日に近くなったらアナウンスすることは簡単にできるだろうし、日付が記入されていないものを発見して催促することも難しくはないだろう？」
「やったことはありまあせんが、それもできると思います」
「最初は、単純なプログラムでも構わないから、直に取り掛かることだ。使いながら、機能を高めていけばよい。それが“End User Programming”というものだ」
「分かりました」
非を認めて素直になれるところみると、見込みがあるかな。

「バグや、納期の遅れなどは、必要なプロセスが省かれたりしていることが原因なんだから、手作業を増やしてしまっては、却って必要なプロセスを省かざるを得なくなるよ」
「毎日の作業結果の入力も、それだけで、総務への作業報告書の大部分を自動生成するくらいの環境の整備が必要ですね」
「そう、スケジューラに向かってその日の作業を入力すれば、報告書の形になって出てくる仕掛けになっていれば、自然にスケジューラを使うことになる。そこで一度入力すれば済むんだからね」
「あとで、不足分を足したり調整できるようにしておけば良いのですね」
「必要なら、総務に出す作業報告書のフォームも変えればよい」
「う～ん、総務は抵抗するかも知れませんね」
「プライドだけの問題だろう？　他から言われて行動するのは嫌がる人もいる。最近、書式が変わったのはいつかね？」
「５年ほど前に今の部長が就任したとき、フォームに変わりました」
「その時に、フォームを変える必要性はあったかね？」
「なんか、主旨を書いたものが回っていましたが、特に新しい項目も無かったし、変更する必要性は感じませんでしたが」
「もしかすると、前任者の色を消したかっただけではないのかね。役人には良くあることだが。『全体最適』を認識して行動できない人は、組織にとって邪魔になるだけだね。必要なら、しかるべきルートを通してでも行動すべきだね。ここで引き下がったら、CMMもプロセス改善も、一つの部門の自己満足に終わってしまい、企業の全体最適に貢献しなくなるからね。ただし、これ以外にも、自分たちの作業の効率を上げるために、コンピュータをフルに活用することで、説得力が増すはずだ。だから順序を間違えないように」
「わかりました」
「とにかく、コンピュータを大いに活用して、皆に『ＩＴ』を感じさせること。『ＩＴ』の恩恵を受けることだ。そうでなければ、仕事がこなせなくなる」 ◆

ＣＭＭや改善活動も、ＩＴをフルに活用しなければ仕事が増えるだけになり、活動を継続させることができなくなる。

 (C) Copyright 2003 System Creates Inc., All rights reserved

暁鐘の音 152

携帯依存症

今、「携帯依存症」という一種の鬱病患者が増えているという。携帯電話を手放せないのである。「空白の時間」を携帯電話で埋めないと落ち着かないのだ。ニコチン依存やアルコール依存も、この「空白の時間」を埋めるために始まったように、携帯電話で誰かと話をしたりして「空白の時間」を埋めているうちに、いつも掛かってくる友人から掛かって来なかったりすると、自分が忘れられているのではないかと不安になってしまう。そうして「鬱病」へと発展したのが「携帯依存症」である。

★　★

それにしても、あっという間に携帯電話が普及した。今では、幼稚園に通う子供から七〇歳を過ぎたお年寄りまで、携帯電話を持っている。一〇代後半からの若者は、ほとんど全員が持っているのではないか。半年ほど前に、新大阪駅のホームで、８０歳は超えていると思われるお婆さんが、手提げの巾着からかわいい色の携帯電話を取りだしてフタを開け、右手の人さし指で一つづつボタンを押している姿を見たことがある。そのほほ笑ましさと、強烈なアンバランスのために、今でも網膜に残っている。

電車に乗っていても、一昔前の「漫画雑誌」が半数ぐらい「携帯電話」に変わっている。座っている人も立っている人も、持て余す時間を携帯電話で潰している。かといって、普通の「本」を読んでいる人が減ったわけではない。漫画雑誌やスポーツ新聞組が、携帯電話を転向したのだろう。

★　★

いい大人が。いかにも「ゲーム機」ですというものを取りだして電車の中でやることはできないが、携帯電話だと抵抗が少ないようだ。出張からの帰りの電車の中で、座っている人と、その前で立っている人が携帯電話で同じゲームをしていた。電車は少し混んでいたが、携帯電話なら片手で操作できる。こうして、多くの人は携帯電話なしでは過ごせなくなった。

★　★

中学生の頃から、携帯電話で自分の部屋で誰に気兼ねもなく友人と話をして時間を費やしてきた人とたちが、大人になっても、その感覚が抜けないのだろう。仕事を終えて家に帰った後も、携帯電話で誰かと話をしていないと落ち着かないのである。だが、学生時代とは違って、生活のリズムは違ってくるので電話の回数も減ってくるし、今まで掛かってきた「友人」から掛かってこなくなることもある。

★　★

一〇代の時に、携帯電話で友人と電話する以外に、「一人の時間」の過ごし方を身に付けて来なかった人は、ここで「一人」に耐えられないかもしれない。一人で「カプセル」に入って宇宙を漂って、友人の家の上を飛んでいる自分に誰も気付いてくれない、自分の存在が消えてしまうのではないかという恐怖に陥ってしまうのだろう。

★　★

実際、携帯電話を家に忘れてしまえば、自分に（直接）連絡できなくなる。何か大事な連絡があっても、自分は直ぐにそれを知る方法はない。携帯電話が家で鳴っているのではないかという焦ってしまい、自分だけ「連絡網」から外れているのではないかという不安に襲われる。

★　★

わずか数年前には、リアルタイムに連絡がつかないことが普通だった。連絡は、一日以上の余裕をもって、相手の家の電話に「伝言」を入れたりするものだった。だが今は、携帯電話は「携帯」されていることが前提となっているので、連絡はいつも「緊急」であったり、思い付いての連絡であったりするため、「その時」に電話に出なければ外されてしまう。

★　★

こうして、多くの人（特に若い世代）は、便利を提供してくれるはずの携帯電話に、脅迫され、いらいらさせられ、心を蝕まれているのである。便利な道具としての携帯電話の接し方を間違えたために、その道具に支配されてしまった。

★　★

巷で問題にしているのはここまでであるが、携帯依存で、もう一つ厄介なことがある。それは思索力が低下しそうなことである。「静」と「独」が思索を練るために必要な環境であるが、その時間が失われている。「静・独」は、何も「無音」の状態である必要はなく、電車の中でも「静・独」の状態を持つことが出来る。実際に、電車の中でも周りの音は気にならずに本を読んだり考え事ができる。

★　★

だが、その時間を携帯電話で潰している。思索の重要性を認識していないために、何もしないことの不に負けて携帯電話のボタンを押してしまう。さっき会った友人にメールしたりして時間を潰してしまう。そうして「一日」は終わる。

いったい、いつ「思索」するのか。このように考えることは、余計なお世話なのだろうか。

■

今月の一言

「子は父より注目されることを欲し、父の賛成を得ようとする。父が子に満足を感じている限りにおいて子自身は自己に満足できるのである。これが父に対する子の自然的愛であって、その愛は子の感性的福祉の保護者に対してではなく、彼自らの価値または無価値を反映する鏡に対するものである」

（フィフテ）【安岡正篤著「現代の道標」より引用】

最近、成長の過程で「父親」の適切な影響を受けたことを感じさせる子供が減っている。電車の中で子供の姿や行動を見ていても、背後に「父親」が見えない。

子供の成長にとって「父親」の役割は非常に大きい。それは、子供の行動に対する規範であり判断の尺度なのである。子供は、どこまでが許され、どこからが許されないのかを、父親の反応から知る。それだけに、父親の満足は子供にとって限りない勇気であり、自己の存在確認なのである。

こうした、子供の価値を映す鏡としての父親がいない。子供を前にして、見え透いた「言い訳」を並べて、父親としての重要な役割を放棄してしまった。いや、父親にそのような役割があることすら認識していないかもしれない。「鏡」を得られなかった子供は、自分を見失って放浪し、社会の壁に頭をぶつける。彼には「壁」は見えない。

それでも「親」にはなれる。だが、「子供」は親を選べない。この現実を前にしたとき、その不条理に言葉を失ってしまう。なぜ、この子がその不条理を背負って生きていかなければならないのかと。そういう不条理を無視するかのように、「現実」は存在する。

父親の愛を感じることなく大人になった人は、将来、「父親」の役を演じることができるだろうか。そこに有ったものですら失われる中で、一旦失われたものが回復されるだろうか。この社会は、それだけの力を持つだろうか。